

# 日本の中の エチオピア



(聞き手：増田 研)

ソロモン・キロスさん：アディスアベバ国際空港にて

メケレ大学生物学科講師(学科主任)のソロモン・キロスさんは、長崎大学大学院生産科学研究科で海洋生産科学を専攻し、博士号を取得されました。2011年3月、博士論文発表会直後のソロモンさんに長崎でインタビューしたほか、2012年9月にもエチオピアで話をうかがいました。インタビューは英語、アムハラ語、ときおり日本語を用いて行いました。

## Q 来日する前の経歴を教えてください。

私は民族的にはアムハラなのですが、ティグライ州のメケレで生まれ、そこで育ちました。メケレ大学を卒業したあと、しばらくの間は地元政府で環境アセスメントの仕事をしていました。たとえば、道路建設の計画が持ち上がると、その現場で環境や地元の人々の生活にどのような影響があるかということ調べる仕事です。

ある時、友人から「日本政府が留学生を募集している」という知らせをもらいました。さっそく応募したところ、アディスアベバにある日本大使館に

面接に呼ばれました。

## Q そうして日本政府の奨学金で来日されたのですが、なぜ長崎大学の水産を選んだのですか？

エチオピアを知っている日本人からは、「エチオピア人が水産の勉強？」とよく聞かれます。じつは日本に留学することが決まってからも、自分の所属先がなかなか決まりませんでした。しばらくして日本の文部科学省から届いたのは、長崎大学の水産学部に決まったという知らせです。これには困りましたね。私はもともと社会科学の出身でしたし、水産はおろか、生物も化学も、高校以来まったく勉強していなかったからです。

## Q そもそもソロモンさんの故郷のティグライは乾燥していて、水産とは縁遠いですしね。

そうです。私もそのあたりの事情を説明しましたが、日本に留学させてもらえるのはありがたいけれど、出来れば、自分の仕事の延長線上で日本の環境アセスメントを勉強できるところに行かせてほしいと。ところが、返事は「ほかの大学に行くの

は構わないが、その場合は奨学金は出ない」というものでした。

そこで考え方を切り替えることにしました。水産は私が関わってきた環境分野の、とくにモニタリングとも無関係ではありません。チオピアでも湖での養殖(内水面養殖)の可能性はありますし、そこにも貢献できるかもしれません。

**Q 日本にはほかにもエチオピア人留学生がいますが、その多くは関東や関西にいます。九州の地方都市で一人でいるのは大変だったでしょう。**

他のエチオピア人留学生とはよく電話で話していました。九州ではほかにも2人ほど留学生がいましたが、会うことはありませんでしたね。

**Q 長崎での勉強はどのように始めましたか？**

長崎でやって来たのは2005年4月です、当初は大学の国際交流会館に住んでいました。長崎大学には、医学部や工学部に来ている留学生がいて、なかにはアフリカから来ている人もたくさんいましたから、英語でのコミュニケーションをとるのには問題はありませんでした。ここで暮らしながら、大学の留学生センターで半年間、日本語の授業を受けました。

その後、大学院生産科学研究科の修士課程に入り、海洋生産科学専攻で学ぶことになりました。私の場合は、学部時代に学んでいたことと、長崎で学ぼうとしていたことがまったく違いましたし、そもそも自然科学の素養がありませんでしたから、修士課程に入ったものの、実質的には普通の大学一年生と同じレベルからのスタートでした。

**Q 長崎では町外れにお住まいでしたね？**

メイン・キャンパスからバスで30分ほどかかる環東シナ海環境資源研究センターにいました。私が指導を受けていた先生がこのセンターに所属していたからですが、分析機器を使わせてもらうために他のキャンパスに

行くこともありました。

私はセンターに近いところにアパートを借りていて、自転車で通学していました。センターは長崎新漁港のすぐそばにあって、そのあたりは東シナ海に面しています。そのためか、船でやってくる不法入国者への警戒が厳しく、肌の色の違う私はよく職務質問を受けました。一度など、滞在許可証を自宅に置き忘れていたために警察署まで連れて行かれ、教授に迎えに来てもらったこともあります。それ以来、しばらくはお巡りさんに呼び止められることもなかったのですが……。警察官も異動しますよね。結局、しばらくするとまた新任のお巡りさんに呼び止められるようになってしまいました。センターでは留学生が多かったこともあって、勉強でもなんでも日常的に英語で済ませてきましたが、ひとたびセンターを出るとやはり日本語が必要になります。私の場合は、アパートの近くにある居酒屋に通ううちに日本語が上達しました。漁港が近いので刺身もとても美味しかったです。

**Q センターでの勉強と博士論文の研究がどのように進められたのか、お話しください。**

修士課程では基礎の勉強から始めました。私はいまは生化学(バイオケミストリー)を専門としていますが、その時点では化学も生物学も初心者と同じで、まずこの部分を学習することが必須でした。大変でしたが、先生たちも大変だったと思います。



長崎大学環東シナ海環境資源研究センターでのソロモンさん

先生たちにしてみれば、大学院生を迎え入れたと思っていたのに、来てみたら水産とは縁遠いエチオピアから来た門外漢だったわけですから。

長崎での勉強と研究は「ドジョウの配偶子形成と生殖内分泌系に及ぼす環境要因の影響」と題した博士論文としてまとめることができました。ドジョウは環境モニタリングの調査対象生物として重要で、その生殖腺発達の内分泌学的メカニズムを調べました。ひとたび実験が始まると、毎日のようにドジョウを解剖して生殖腺をとりだし、分析機器にかけていました。

**Q 留学を終えていまはメケレ大学で教えていらっしゃる。今のお仕事とこれからの抱負をお聞かせ下さい。**

エチオピアに帰国してから就職先を探すのには苦労しました。帰国後半年して、ようやく母校のメケレ大学に講師として採用されました。エチオピアでは近年、大学の施設が相次いでいるのです

が、その一方で教師が不足しています。多くの大学で、博士号を持たない教員が自然科学の分野でもたくさんいます。

いまは生物学科の主任としてたくさんの雑用を抱えながら教育をしています。「生物学科」とはいつても、たとえば私が長崎大学で自由に使うことが出来たような実験器具や分析機器はまったくありません。いまは、なにか分析したい試料があると、50キロほど離れたところにある製薬会社の工場に持ち込んで、その会社の好意で分析をさせてもらっています。こうした教育環境では実習授業はできませんから、ほとんどの学生はフィールドワークも実験も、なにも経験しないまま座学だけで卒業することになります。

日本で身につけた専門性を生かして、エチオピアの環境問題に関する研究に従事しながら、教育のための環境整備にも力をいれなければならないと感じています。